

2 4. 高次脳機能障害者や失語症者を支える家族が直面したコロナ禍の影響に関する予備的調査（第一報）

病院リハビリテーション部 北條具仁、浦上裕子、山本正浩、河内美恵
病院障害者健康増進・運動医科学支援センター 山下文弥

【はじめに】大規模災害時におけるリハビリテーションのあり方や家族支援の重要性についての報告は集積されているが、コロナ禍における高次脳機能障害者や失語症者を支える家族のニーズや支援のあり方に関する報告は見当たらない。当院に入院あるいは外来でリハビリを受けた高次脳機能障害や失語症を有する患者の家族を対象に調査を行い、得られた結果の分析からコロナ禍で高次脳機能障害や失語症のある者を支える家族の介護状況やニーズを把握し、適切な介入について検討する。

【対象】当センター病院で入院あるいは外来通院をしている高次脳機能障害のある患者と同居している家族。2021年8月～9月に配布可能であった高次脳機能障害症例2名、失語症3名の計5名の家族を対象とした。4家族（高次脳1名、失語症3名）が参加、1家族は辞退した。患者本人と記入した家族との続柄は、父1名、妻3名であった。

【方法】4つの設問に対する自筆式で自由に記述するアンケートを実施。設問は、コロナ禍になって①以前に無かった患者の変化について、②変化に対する家族の対応、③患者様への対応で家族が新たに困ったこと、④家族に生じた気持ちの変化、についてである。得られた回答をカテゴリ毎に分類し、その内容を考察した。

【結果】①はコロナ禍の社会的変化と、患者本人の変化の2つに大別された。前者は面会制限、暗いニュース、リハビリに行けないであった。後者は活動の低下、テレビ視聴時間の増加、いらいら、機能低下への不安などのネガティブなものもあったが、親子の間が近くなった、穏やかになったなども見られた。②好きなことをさせる、家族や友人と電話やラインで積極的につながる、子供には別の時間に患者の思いを伝えるなどが挙げられた。③意欲の低下、助言に対する反発が挙げられた一方、特にないというコメントも認められた。④ストレスへの対応方法を知りたい、病院からの連絡やアドバイスを希求するコメントが認められた。

【考察】高次脳機能障害者の家族の対処スタイルの変化には障害への気づきが必要であり、その支援を行うことで家族自身が解決に向けた方略を考えられるようになることが示唆されている（小野瀬ら 2019）。気づきのステップを病院のスタッフと共に歩めず、また家族会のような支援機関ともつながることを困難にしたコロナ禍で家族が新たな変化に対して困難を感じたことが示されたと考えられる。一方、活動の低下、いらいら、機能低下への不安などと病院からの連絡やアドバイスを希求する声は関連があると考えられる。家族でできる対応も行っているものの、活動や心理面を一定水準に保つ上で定期的診察やリハビリが機能的に働いていたと考えられ、これに代わるサポート体制の構築が必要であることが改めて示されたと考える。また家族のみで高次脳機能障害のある当事者を支えることは困難が多いため、現在開催を見合わせている当院の家族学習会のような家族同士のつながりの再建も急務であると考えられた。